

# 現代中国の観音信仰

—— 仏教と民俗宗教の媒体としての観音菩薩 ——

駒澤大学名誉教授 佐々木 宏 幹

## 一 はじめに

この二十二、三年のあいだ、私は東南アジアの華人社会（中国本土を離れ、他国に定住するにいたった中国人の集団）において、民俗宗教（精霊や呪力を信仰するような原始的な信仰形態が仏教や儒教のような教典・教理宗教の影響を受けて形成された混交的な宗教形態であり、主に民衆とか庶民と呼ばれる一般生活者によって信奉される）がどのような現状にあるか、さ

らにそれが仏教（寺院と僧侶）とどのように関わっているかについて、調査を重ねてきた。

民俗宗教は英語でフォーク・レリジョン (Folk religion) と呼ばれるが、フォーク (Folk) は「人びと・世人」という意味と「古くからの習慣や信仰などを継承する人びと」という意味をもつ。だから民俗宗教は、庶民信仰とか土着宗教としばしば同一視され、教典・教理宗教の立場からは、迷信的で呪術的かつかいがわしい宗教と見られることが多かった。

ところが民俗宗教の実態を調査研究してみると、それが決して仏教のような教典・教理宗教と対立する宗教形態ではないことが見えてきた。対立するどころか民俗宗教は現実には教団（集団）化された仏教の「生きた姿そのもの」であり、さらに言えば「民俗仏教」として実質的に教典・教理仏教を支えていることがはっきりしてきたのである。

一例を挙げよう。私は先に民俗宗教は「精霊や呪力を信仰するような原始的な信仰形態……」であると述べたが、一体アジア仏教文化圏において仏教僧侶が精霊（死霊や祖霊）や呪力（行力や祈祷力）とまったく関わらないところがあるろうか。わが国は「葬式仏教」の国と言われるが、この形態は正に教典・教理仏教と民俗宗教との見事な連携であり複合ではないのか。このように仏教が「生きている場面」では、仏教と民俗宗教とは「習合・複合」しているのが自明

なのに、どうして学問的には両者を対立的としか捉えないのであろうか。端的に言えば、これまでの仏教研究は文献学中心の教典・教理の研究に極端に傾斜し、人間や社会の現実に生きる仏教、つまり民俗仏教を等閑視してきたからである。テクスト重視のあまりコンテクストが軽視されてきたからである。

今後の仏教研究は、テクスト（教典）とコンテクスト（社会）の両者を視座に収めないと十分な成果を挙げ得ないのではあるまいか。以下では中国（華）人社会において、仏教（ここでは教典・教理を志向する僧侶とその活動の場である寺院）と民俗宗教（ここでは精霊や呪力を求める一般民衆および精霊や呪力に専ら関わる巷間の霊能者）とを媒介する重要な媒体としての観音（信仰）を取りあげ、仏教と民俗宗教間のダイナミズムについて述べたい。

## 二 シンガポールの生き仏

シンガポールは華人の国（総人口の七五％が華人）であり、東南アジアで最も近代化されたハイテク社会である。教育程度が高く、中年以下の世代は華語に加えて英語とマレー語に通じている。

宗教はどうであろうか。「シンガポールの仏教」という論文をものしたV・ウィーは当地の仏教を「教典仏教」と「仏教的要素を含むシンクレティック（重層的）な中国宗教」および「仏教的要素を含まないシンクレティックな中国宗教」の三つに区分している。

少し解説を加えると、「教典仏教」とは伝統的な仏教を忠実に実践し、非仏教的と考えられるいかなる儀礼の執行も頑なに拒んでいる僧侶の仏教で、その数は少数、次に「仏教的要素を含む中国宗教」とは教典の教えにも従うが民俗的

儀礼・慣行にも参与する僧侶と信者の仏教で、その数は最も多い。第三の「非仏教的な中国宗教」は道教的な霊能者中心の民間宗教で、やはり数が多い。これをわが国の仏教現象に比定すると、概して「専門僧堂の仏教」、「一般寺院の仏教」および「民間信仰」となるうか。

V・ウィーの分析は大変示唆的であるが、問題がない訳ではない。ウィーは「非仏教的な中国宗教」の廟は、霊能者（霊媒）の施設であると断じているが、私の調査では霊能者のなかにも仏教と関わり、俗人を仏教に架橋している人物が少なくないからである。

シンガポールのレース・コース・ロードにある「南海観音仏祖」は女性霊能者の主権する廟として有名である。この観音仏祖の像は先代の女性霊能者が、中国浙江省の観音霊場普陀山から勧請したものである。この廟の霊能者（現地ではタンキー〈童乩〉と呼ばれる）は人びとが



南海観音仏祖の化身（シンガポール）



聖観音の化身（シンガポール）

ら「生き仏」と称される。毎日、午前と午後  
に数時間儀礼を行なうが、その際に、観音の仏格  
が彼女に憑依し、彼女は観音に化して人びとの  
悩みや苦しみに対応する。主な役割は宗教的カ  
ウンセリングであり、さまざまな人生問題に示  
唆を与えるとともに、人びとの求めに応じて靈  
驗あらたかな護符を作り与える。

注目すべきは、彼女が依頼者や信者たちにな  
いして、真に人生苦を解決するためには観音を  
祀っている仏教寺院に行き、僧侶の指導を受け  
るように勧めている点である。

アッパー・トムソン・ロードに位置する楊天  
宮も女性霊能者の廟として知られる。ここでは  
祭壇に感天上帝、千手観音と十八羅漢を祀って  
いる。彼女は感天上帝または観音の化身として  
振る舞うが、とくに病気をめぐっての判断と指  
導で名をなしている。千手観音生誕日とされる  
日には、仏教寺院から僧侶を招いて『観音経』

を読誦してもらおう。

このように霊能者の宗教であるからと言って、  
すべてが非仏教的であるとは言いがたいのである。  
大きな枠で見ると、彼らは民衆を仏教に関係  
づける動機（媒介）の役割を果たしているとい  
うことになろう。

### 三 中国本土の仏教と民俗宗教

シンガポールでもマレーシアやフィリピンで  
も、華人社会の宗教は、寺を中心とする仏教と  
廟をめぐる民俗宗教の大別して二つの領域から  
成っている。そして仏教と民俗宗教は対立して  
いるのではなく、相互に影響し合いながら民衆  
のニーズに応えていた。仏教僧侶と民俗的霊能  
者を二つの領域に区分するのは正しい。宗教的  
伝統を異にしているからである。しかしこの「区  
分」を固定化すると、「生きた宗教としての仏教」  
は見えてこない。

寺と靈能者の廟は異なる。しかし民衆はその両者を必要とし両者に関わるから、両者の関係はスタティックではなく、つねにダイナミックである。そして異なる両者を繋ぐのにあづかつて力ある役割をもっているのが観音（信仰）である。

東南アジア各地に移住した華人の多くは、中国本土は福建省の厦門アモイから出港していたことを突きとめた私は、まず民俗宗教の調査を厦門から始めた。東南アジアの華人社会の靈能者はどこでも童乩タンギと呼ばれているが、厦門とその近隣地域でも童乩の語が使われていた。私は今のところ、童乩のルーツは多分福建省の厦門を中心とする地域ではないかと推定している。他地域ではこの語は使われていない観があるからである。

厦門とその周辺には、数多くの女性童乩が存在する。彼らの守護神（仏）はさまざまな観音

である。聖観音、千手観音、南海観音、紅面観音、白衣観音等々。調べてみると靈能者の多くは、観音像を厦門の大刹南普陀寺（観音靈場で有名）か前記浙江省の普陀山普濟寺で求め、僧侶に開光・開眼してもらってから、自宅の祭壇に安置していた。

彼らはここでも観音の化身として人びとの願いに応じていた。彼らは時を定めて信者たちを引率し、普陀山や九華山（地藏信仰で有名）を訪ね、僧侶に依頼して死者の救済を目的とする超度や餓口、水陸会などの儀礼を修行してもらう。多額の布施が必要であるという。ここには、靈能者が依頼者の不幸や災厄の原因が死者の冥界における苦しみにあることを知りえたとしても、死者を苦界から救済するには有名寺院の僧侶に依頼するしかないとの論理がある。地位的には、仏教僧侶優位、靈能者劣位の構造は明白である。



南海観音の化身（中国・廈門）



高さ33メートルの南海観音（浙江省・普陀山）

僧侶に靈能者との関係について尋ねると、きまって答えは「われわれは彼らのごとき迷信の徒（草頭神）」とは何の関係もない」である。しかし実際には、靈能者が購入した観音像に力を封入（開光）したのは僧侶であり、この観音の力を信じた人びとを寺に誘い僧侶に儀礼を行なってもらうのは、靈能者とこれを信じる人びとである。観音像は僧侶の開光・開眼により「力ある仏」となり、この力ある仏に観音が人びとを寺に導き、布施としての金銭が寺を支える資となっている。南普陀寺では附属の閩南仏学院において百余名の学僧が「教典仏教」を学んでいる。これが可能なのは御利益を求めて観音妙智に縋りつく民衆がいるからであり、この民衆の信仰を活性化させる靈能者がいるからである。仏教と民俗宗教は、ここでも観音（信仰）を介して相互補完関係にあると言えよう。

#### 四 観音の力

中国では一九六六年から七六年頃にいたる、いわゆる文化大革命期にあって、紅衛兵の活動が全国的に激化した。彼らは「破四旧」（旧思想・旧風俗・旧習慣・旧文化）のスローガンの下に伝統文化の破壊を実行した。このため、寺の仏像や經典は破壊または焼却された。しかしこの時期においても、各種靈能者の活動は秘に続けられていたという。

一九七九年、改革開放運動が始まると、仏教も民俗宗教も急激に息を吹き返した。とくに村々に人びとに守られながら潜在し続けた靈能者の復活が早かった。そして彼らが祀った守護神（仏）のなかでとりわけ多かったのが観音菩薩であったという。

どうして人びとは、あまたの仏菩薩のうち観音をことさらに信仰するにいたったのであろう



か。観音（信仰）はとくに大乘仏教の地である東アジア（中国、朝鮮、日本）において盛行した。それは、大乘仏教の教えが仏陀の智慧に加えて慈悲つまり一切衆生の「救い」を強調するにいたったからであると言えよう。

観音はサンスクリット語では「アヴァローキテーシュヴァラ」(Avalokitesvara)と呼ばれ、「アヴァローキタ」(観る)と「イーシュヴァラ」(自在に)の合成語であり、「観自在」と漢訳された。また中央アジアで発見された『法華経』では「アヴァローキタスヴァラ」(Avalokitasvara)と記されており、「スヴァラ」(音・音声・声)が接尾語となっているから「観世音」と訳された。観音は「観自在」と「観世音」の略語である。

いずれにせよこの菩薩は、世間（社会）の苦しみの声（音）を鋭く「観」ぬき、「自在」に力を駆使して人びとを救い出すという性格をもつ



普陀山の仏像店（浙江省・普陀山）

とされる。

また観音は諸菩薩のなかで唯一、救いを求める人びとの願いに応じて、その姿形を自在に変化させるといふ性格をもつ。さらに観音は東アジア地域では母性的特徴をもつ菩薩と見られるにいたり、母の慈愛の象徴と受けとられることとなる。

このように、観音が具える「救済性」「変化性」および「慈母性」は、大乘仏教の説く「自未得度先度他」の思想の具体的な表現として民衆から強く信奉される対象となった。

とすれば、観音菩薩こそは仏教と民俗宗教という理念的に相異なる宗教形態を变幻自在な営みで連携・習合させ、もって民衆の救いを実現させるのに、最適の仏であると言えまいか。

佐々木 宏幹（ささき こうかん）

一九三〇年 宮城県に生まれる。駒澤大学文学部を経て東京都立大学大学院博士課程修了。

専攻 文化人類学・宗教学人類学。文学博士。

現在、駒澤大学名誉教授。日本宗教学会常務理事。国際宗教学研究理事。

著書に『宗教学人類学』（講談社）、『聖と呪力の人類学』（講談社）『仏と霊の人類学』（春秋社）『神と仏と日本人』（吉川弘文館）『シャーマニズムの人類学』（弘文堂）ほか。

